
異世界の生活

するめ315

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

異世界の生活

【Nコード】

N1027T

【作者名】

するめ315

【あらすじ】

異世界での生活は、未知と不満でいっぱいです。

『異世界の朝』『異世界の人間』の続編です。単体ではあまり楽しめないと思うので、前々作、前作を読むことをお勧めします。

（前書き）

異世界の〇〇シリーズの最新作。楽しんでいただけたら幸いです。

とある午後の昼下がり

一般サラリーマン家庭の三兄妹の末っ子として生まれた私には、豪華すぎるほどのアフタヌーンティーのセットを目の前に考えるのは……今置かれている現状である。

この世界に来て早3週間という月日が過ぎた。

バツシユの気遣いのかいあってか、生活はとても快適だ。

食事のほとんどが、日本で言う洋食のような感じで、とってもおいしい。

さすがお城って感じたが、ときどき見た瞬間に食欲をなくすような青や、紫の物がでる。

口に入れてみればたいへんおいしいのだが、入れるまでの勇気が図り知れない。

服はお城だからなのかドレスが基本。

現代の女子高生には少し動きにくいうえに、コルセットは少し苦しい……。

あとなんでか知らないけど、胸の露出が激しい気がする。こつゆうのが流行りなのか……。

勉強はやっぱり難しい……。

文字は、言葉が通じるからもしかして……と思っていたら読めたのでラッキーだったが、書きはビミョー。

しかし、問題はこれだけではなかった。

礼儀作法は身体動かすことだからまだいいとして、歴史。これが問題だった。

貴族同士のバックグラウンドも絡めて、話されるからわけがわからない。

私、歴史とかやりたくないから理系クラスに進んだのにな……。

あと、お風呂。これはなかなか曲者だった。

この国の主流は蒸し風呂で、あかすり？みたいな奴だった。気持ちいいんだけど……なんか物足りない。湯船が恋しい。

このことをバツシュに話したら、なんとかしてくれるって言うてたから、もう少しの我慢。

バツシュから私のお世話係に侍女と護衛が付けられた。

侍女はラナン、ナージャ、イルミナの3人。3人ともすごく美人で可愛い。護衛はターナとラシエル2人、こちらも頼りになる姉御肌の美人さんだ。綺麗なモノ好きの私としては、バツシュも含めて、いい目の保養になっている。

侍女も護衛もいらないうって言ったんだけど、客人をもてなさない国だと思われると困るって、押し切られた。

百歩譲って、侍女はわかる。恥ずかしいけど、お風呂とか、着替えとか慣れないし、一人ではできないから。

でもなんで護衛……。バツシュは危ないからだって言ってたけど、なんで危ないんだろう……。

聞いた話によると、女性の騎士は少なくてすごく貴重らしいのに……。

しかも、危ないからって、この世界に来てから3週間、バツシュ抜きで一度も部屋から出してもらってない。

こんなんじゃ、私の本来の目的が果たせないよ。

城下の街だっ て見てみたい。

せめて、ストレス解消に好きな時に庭に出るのぐらい許してほしい。

「はあ……」

思わずため息がこぼれた。

「どうかなさいましたか。勇姫様。」

近くにいた侍女のラナンが反応した。

「うん。だっ て暇なんだもん。部屋の中ばかりなのはストレスたまるよ……」

「申し訳ございません。陛下からお部屋から出さないように言われておりますので……」

「……うん。それはわかってるよ。無理矢理部屋から出て、ラナン達が怒られるのは困るしね。」

「勇姫様……」

ラナンにすぐ心配をかけてしまったみたいだ。

しかし……不謹慎かもしれないが、美人の憂い顔はなんて絵になるんだろう……

カメラ欲しい。写真撮りたい。

「さま。きさま。勇姫様。」

「は、はい。」

ずいぶん前から呼ばれていたようだ。どうも美人に見とれすぎていたらしい。

「大丈夫ですか？勇姫様。どこか御加減でも悪いのではないですか？」

「う、ううん。平気だよ。」

「なら、よろしいのですが。」

「本当に大丈夫だって。ところで、呼んでたでしょう？なあに？」

「はい。お暇だとおっしゃられた件ですが……陛下に申してみてもどうでしょう？勇姫様のためであればお時間を作っていただけたと思いますし、最低限お庭ぐらいの許可はいただけたと思います。」

「そうかなあ。」

「ええ、陛下は勇姫様からのお願いは断れないですから。」

「ううん。じゃあ、夕食のときにでも頼んでみようかな。」

「それがよろしいかと思います。ところで、勇姫様。」

「ん。なあに。」

「今朝も夜着を着ていらつしやいませんでしたね。」

「……だって、裸の方が気持ちいいんだもん……。」

「……勇姫様……お願いですから夜着をまとうてお休みください。獣を刺激し、要らぬ火の粉を被るようになりますよ。」

「……それは、どういう意味？」

「いいえ、なんでもございませ……。」

そのまま、火の粉発言は流されてしまった。

しかし、私は、この発言を深く追求しなかったことをのちに後悔することになる。

気付かなかったのだ、侍女たちが、護衛の騎士までもが執拗に私に夜着を着せようとしている理由を。

知らなかったのだ、バツシュが秘密の通路を通って夜中にこの部屋

にかよっていることを。

侍女や護衛たちは、こんなにも私を守ろうとしてくれたのに。
。

(後書き)

続くのか？

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n1027t/>

異世界の生活

2011年5月9日09時48分発行